

戸隠神社



戸隠神社
初代神主・久山理安の位階拝任
堀井謙一

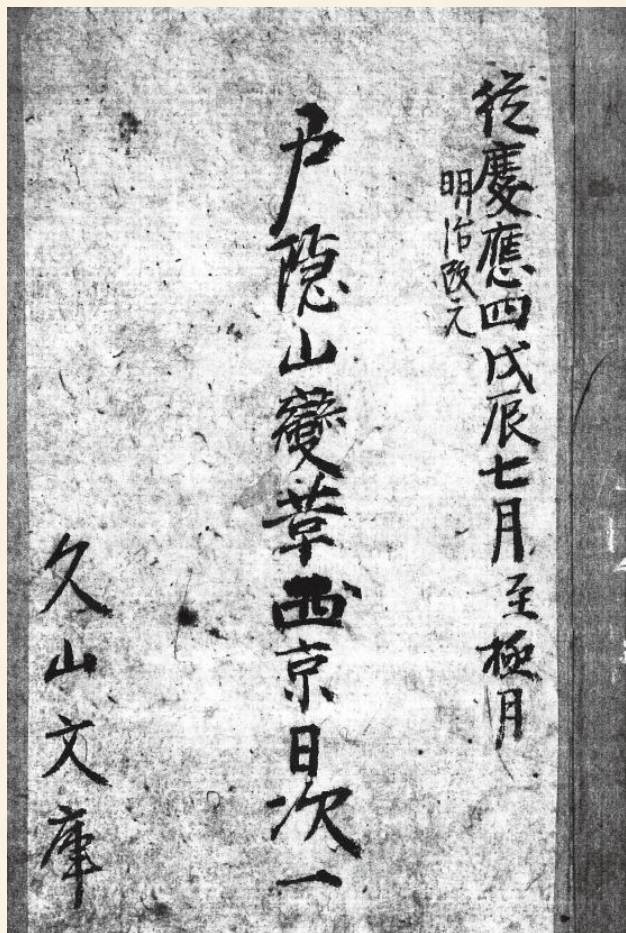
「戸隠山変革西京日次」は平成になつて発見された文書である。「西京」は東京に対して西の都である京都を指す。「日次」とは日記のことだが、公務の日記であつて、江戸から明治への激動期に、戸隠を寺から神社へと移行させた当時の人々の奮闘の記録である。

慶応四年七月十三日、戸隠山顕光寺最後の別当にして戸隠神社最初の神主である慈谿・久山保(理安)は、代官の小川信造等を従え、三名の衆徒惣代(中院の行勝院、奥院の常楽院、宝光院の善法院)と共に京に向けて戸隠を出立、神仏分離令による寺から神社への移行について神祇官と折衝、九月十四日に無事に久山保は神主の職号を拝命し、十月には社中三十六人も権神主職や祓宜職に任命される。その後、思いがけない諸問題にも取

り組むことになるが、翌明治二年の八月二十六日に理安さまは帰山の途につき、九月十三日をもって終わる。

書き手は明治元年(慶応四年)十一月三日までは行勝院の武井磨だが、神祇官との折衝も一段落つき、四日には武井を含む惣代三人はひとまず戸隠へ帰山、その四日からは位階拝任のために京に残つた理安さま(久山神主)が書き手となる。

この日記には、神祇官との折衝はもとより、変革期に於ける山内の混乱、さらには江戸幕府が倒れ、幕府直轄であった戸隠社領が松代藩支配となるか神祇官直属となるかの帰属問題を巡つての交渉などが記されている。これらについては、早くは『戸隠・総合学術調査報告』に尾藤正英の論があるが、気がかりな点もある。



「戸隠山変革西京日次」の表紙

尾藤は、惣代一行が戸隠に戻り、十一月二十日には「本坊へ三院の一同が参集し、久山神主から、来る二十五日にいよいよ神道への転職を実行する旨が告げられ」たという。そうであるなら、午前中の仏式によるこれまでの寺としての報恩、午後には御幣を立てた神社としての神勤という、戸隠神社発足の二十五日の儀式も当然理安さまが差配していたはずである。

しかし、十一月に武井等の惣代が帰山する直前の十月二十八日の「戸隠山変革西京日次」には次のようにある。

御前(理安)様は京に留まって、天皇が東京からお戻りになられたら、位階を拝任した上で戸隠に御帰国の予定、惣代三人と小川氏や家来たちは一先帰国して来春に御前様を御迎えに上京するように決定(現代語訳以下同)

この記述のように、理安さまが京に残り、十二月の東京からの天皇の還幸を待つて位階を頂いた上で戸隠に帰国の予定、その前に惣代三人は一先帰国して、来春に理安さまをお迎えに再度上京することにしたのなら、戸隠における十一月の、寺から神社への一連の行事には理安さまは参加していないことになる。事実、本坊で僧から神官への転職を指示したという二十日には、理安さまは松代藩との問題で京の神祇官に出頭している。

尾藤は在京中の事にも触れているが、おそらくは同行していた奥院衆徒の日記であろう「上京復餽願日記」(奥院衆徒共有文書709号)に依拠し、それは昭

※あをがき(青垣)とは切り立った険しい山が垣根のように連なる様子。当社では祝詞の中で「青垣成す戸隠山の麓に鎮まり坐す戸隠神社」と用います。

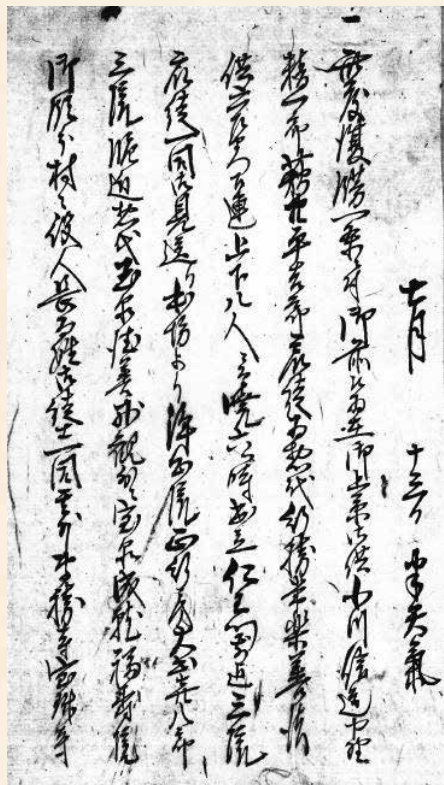
和のことで平成に見つかった「戸隠山変革西京日次」は見えていないと思われれる。筆者は「上京復餽願日記」の方を見ていないのだが、いずれにせよ、この辺の事情は諸資料を再検討する必要があると思われる。

その理安さまの位階拝任だが、明治二年一月十三日の項に、

また綾小路殿の御猶子である琴陵が、五位に昇進した時の事情を尋ねておいてくれるように頼んでおいた

とある。猶子とは公卿や武家の社会で、主として兄弟や親族の子などを自分の子として迎え入れたもの。家を相続する養子ではなく、仮親と猶子が社会的な結びつきを強めることに意味がある。豊臣秀吉はまず近衛前久の猶子となって箔を付け、それから関白になつていく。

理安さまは久世権大納言通理の猶子であり、理安の名前の由来もこの辺りにあ



西京日次 書き出しの部分

る。この仮親と猶子の関係によつて久世家は戸隠に影響力を持つことになるし、戸隠は京において久世家という後ろ盾を持つことになる。仮親の通理はすでに亡くなつていたが、久世家の現当主はいわば理安さまの義兄弟という理屈で、理安さまは京に着いた翌々日には、侍二人、草履取一人を供に久世殿へ挨拶に参殿している。

さて、先の日記にあつた綾小路殿の猶子である琴陵とは、金比羅宮の神主である。その琴陵が五位ならば、久世殿の猶子である理安さまも五位を拝任してもよい理屈になる。

明治二年一月二十日に年始御礼天機伺いとして諸社と共に御所に参内した際の理安さまはまだ無位であつた。無位の者の参内とは驚きであるが、久世殿の力であつたかもしれない。

ほどなく三月には理安さまにも位階の拝叙があつたが、五位ではなく六位であつた。三月四日の記録には、

久世家へ参上し、今日の神祇官からの決定通知はいかにも残念な内容であるので、どうか五位が頂けるようにお取り成しをいただけないかとお伺ひした

とある。六位拝叙は残念なので、久世様の力でなんとか五位を頂けないかという取り成しのお願ひである。

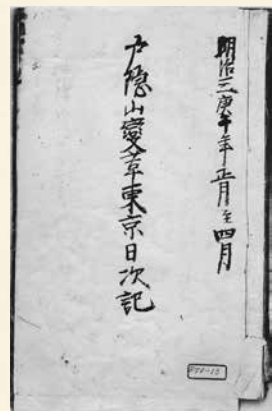
当日の夜の久世殿からの連絡では、いろいろ働きかけてみたが、急いで官位が欲しいければ六位、急がなくても良いなら天皇が東京に行幸してから再検討という結果になつたという。

当面は六位で我慢と言うことになるが、昨年まで顕光寺を名乗つていて神社になつたばかりの戸隠が、一月に無位で参朝したり、三月に六位になるのはやはり私には驚きである。

とはいえ、戸隠と同じ神仏習合であつても五位となつた金比羅宮とは何が違つたのか、綾小路殿と久世殿の影響力の違いか、はたまた過渡期であつた神祇官内の基準の不統一か、つまりは複雑な力関係の結果であろうが、いまは判らない。

この五位昇進の願ひは、理安さま個人の立身出世の願ひではない。神主の官位が社格をも意味することは、五月十九日の「天機伺い」に参朝した十五社とその官位をみれば判る。

十五社とは、御祖宮こと下鴨社(二位)・松尾社(三位)・春日社(三位)・加茂社(三位)・稲荷社(三位)・日吉社(三位)・日御崎社(三位)・梅宮社(三位)・平野



「戸隠山変革東京日次」の表紙

社(三位)・吉田社(記載なし)・大原野社(記載なし)・石清水社(五位)・八坂社(五位)・北野社(五位)、そして六位の戸隠社である。

その後も理安さまの昇任のための努力は続き、一月に六位であつた北野社の吉見が五月には五位になつているので、七月七日には吉見方へ出かけて行く。そして六位より五位への昇進の願ひ方を詳しく聞き、昇進の願書を写させて貰うなど、理安さまの奮闘は続く。

ただ、政治の中心はまさに東京に移りつつあり、神祇官そのものが浮き足立ち、諸案件も京での解決は不能となり、舞台は東京へと移らざるを得なくなる。それはまた別の「戸隠山変革東京日次」に記される世界である。

ともあれ、新政府による新体制の元で戸隠はさらなる激変を迎えるが、戸隠神社の社格は明治六年に県社となり、二十三年の国幣小社昇格へと、理安さまの社格向上の努力は続くことになる。

ほりいけんいち氏 プロフィール

静岡県出身、長野市在住。東京教育大学文学部卒。琉球大学を経て、信州大学名誉教授。近代文学を専攻するも、近年は戸隠信仰に関心をもち、信濃毎日新聞から「古道を歩く 戸隠神社五社めぐり」を出版。別に端戸信輪のペンネームで「戸隠権現鎮座考」「戸隠山九頭龍考」「鬼女紅葉伝説考」などがある。